

# ジャン-ジャック・ルソーの『エミール』 における教育観とその男女論と結婚論

小 沼 和  
佐 藤 良 吉

## 1. 『エミール』の教育的意義

『エミール、または教育について』という題のルソーの著作は教育の原理の深層究明の教育学書であると共に、教育の本質を自然と人間性そのものに求めた異色な論文である。発想、内容、形式ともに独自の性格を持ち、著者の真意を理解するにあたって広汎な思索を要するのである。あれかこれか思い悩みながらも尽きせぬ関心と魅力で著者の真意の理解に努めながらも果たせず、思い余って自らの人生のくさぐさを拾い集めて、あらためて自らの人間形成の跡をたどりながら自己理解のうえに、自分としての教育観の確立をはかり、著者と世界を伴にすることによってその真意に迫ることにした。

この書は真の教育書であるがゆえに、他の教育論にくらべてその内容や主題の規模が拡大で論拠も深く、論理の展開は現実的生活の神髄を余すところなく包含しての哲学的な思惟で人間教育を解明しようとしている。したがってその理論や理念は、人間の教育は誕生の時から人間自身の自然の営みであり、すでに自分で学んでいるという冷厳な事実に基づくものである。すなわち、「われわれの教育は、自然から、人間から、事物から、来る。」教育は人間とともにあるとの自然主義に立つ人間教育論である。

この『エミール』の教育思想は教育の概念を極限まで拡大して、人間の生活のすべてで教育は自然発生的に営まれ行なわれているものとして、教

育を考察している。したがってルソーにおいては生活と教育は同じ意味を持つものである。このように教育の意味が拡大されると、教育を論ずる立場は教育する者にあるのではなくて逆に教育を受ける者にある。ルソーの教育論は終始教育を受ける子どもの立場で教育を論じている。

このことから、『エミール』は教育論という概念では理解できないほど内容が拡大で、その論拠も深いことから、理論的な教育哲学の書であるといえる。そして、その教育理論の展開において、その理論や理念が一読してはそれとわからないほど、多くの具体的な例話や、理解しにくい逆説や皮肉や誇張をちりばめている。これは、ルソーの数奇な人生が人間の生き方の複雑さとその矛盾を直視しながらも、なお真実の生き方を求めようとした彼の理想主義的な生き方によるのであろうと思われる。したがって、彼の人生は当然、生活に対する認識と人間理解に対する発想の転換が必要であったにちがいない。それが、例話、逆説、皮肉の持つ重要な意味であると考えられるので、充分注意してその教育的意義の理解に努めたい。

しかしこのことは、その理論や理念の理解にあたって、困惑を感ずることが多く、その意味内容の多様性から真意を見つけ出すのに苦労するのである。そこで、『エミール』を冒頭から丹念に読み、理解と納得が得られるごとに着実に一步一步先に進むことにした。そして、『エミール』という書名は一人の教師が一人の生徒エミールを生まれてから二十五歳で結婚するまで教導くこの物語の少年の名前によることから、その第五篇の主題が女性論を中心とする男女論と結婚論であることと、内容としては青年エミールの教育の最後の課題が結婚であることなどから、第五篇から逆に第四篇、第三篇と読むことを試み、教育と結婚の関係を考察してみた。そこで、ルソーにおいては教育は生活及び人生と同義語であることに鑑み、第五篇にはそれらのことがすべて論述されていることと、青年エミールの教育の最後の課題が結婚であることとを合わせ考えて、教育と結婚についての意義を明かにするため第五篇について考察することにした。考察の方

法として特に留意した点は丹念に読むことによって私自らの教育的知識と経験で理解を深めるということにした。

考察の方法及び観点がひたすら精読と自らの教育経験であることの理由は、『エミール』は知性によって読もうとすると理解しにくい面があるが、感性すなわち心情をもって読むと共感を覚えることが多々あるからである。自らの教育経験で味わった心情を大切にしながら、ルソーの教育思想とその心情を重ね合わせて『エミール』の理解の深化をはかることにした。

それに、ルソーの教育思想の根本的立場が子どもにあるという児童・生徒中心の思想からもあえて、『エミール』の教育思想の理解にあたって、私自身の教育経験による『エミール』の理解という要素も加味することにした。そして、『エミール』の第五篇は、男女論、恋愛論、結婚論、旅行論、政治制度論などが内包されていることから、教育についての固定観念にとらわれないようにと心がけた。したがって、『エミール』の第五篇の冒頭から精読に努め、一言半句といえどもおろそかにすることのないよう、その真意を確かめながら一行一行、考察を深め、それを記述するに当たっては、必ず『エミール』の原文を転記して、それに基づいて自らの考察を記述することにした。

本論中のルソーの引用文は、玉川大学出版部の世界教育宝典の『エミール』訳者永杉喜輔、宮本文好、押村襄、に拠った。

## 2. 『エミール』における男女論

青年エミールの教育の最後の課題は結婚である。エミールの教師は彼の結婚に責任があると考えている。『エミール』の第五編の主題は女性論と結婚論である。ルソーがエミールの教育に自然の摂理をその原理として情熱的に献身したのは、青年エミールの教育の最終の課題が結婚にあることを深く理解していたからである。第五篇の冒頭で、教育の最後の課題は結

婚であり、エミールが人生の理想的伴侶と結婚すべきであるとしている。

「わたしたちはいまや青春時代の最後の幕に到達した。しかし、まだ大詰めにきたわけではない。男が独りであることはよいことではない。エミールは男なのだ。わたしたちはかれに伴侶を約束しておいた。いまこそ、かれに伴侶を与えねばならぬときだ。その伴侶はソフィーである。……まず最初に彼女の人となりを知ろう。」391 ページ

エミールの教師であるルソーはその教育において青年エミールが人生の理想的な伴侶を見つけて、二人が結婚するまで責任があると考えていた。この教育観と人生観は教育の最終目的が結婚にあることの証しである。したがってエミールを精読するにあたって、あらためて第五編から逆に第四編そして三編へと読み進むことによって、第一篇の凝縮された彼の教育意図を一そうよく理解することができる。

教育が人格の完成を目的とするならば、それは同時に、理想的な結婚を目指すものでもあると考えられる。そこで、男と女はいかなるものであるかのルソーの男女論を深層において理解することが必要である。ルソーは結婚の絶対条件として、特にソフィーとエミールの結婚について、両者が肉体的、精神的に女であり男であらねばならないとしている。この男女の肉体と精神は本質的にいかなるものであるかの吟味は教育と結婚の関係究明にとって大切なことである。

「ソフィーは、エミールが男であるように、女であらねばならぬ。すなわち、肉体と精神の秩序の中で彼女の立場を満たすにたただけ、その種およびその性の成り立ちにふさわしいいっさいのものを有していなければならぬということだ。それゆえ、彼女の性とわたしたちの性との一致点と相違点を吟味することからとりかかるとしよう。」391 ページ

この男女の性の一致点と相違点の吟味は、ルソーにおいて、その教育の出発にあたってすでに構想されている。『エミール』の劈頭の文章に「創造主の手から出るとき事物はなんでもよくできているのであるが、人間の

手にわたるとなんでもだめになってしまう。」との記述によっても明らかのように、社会の習慣、偏見が子どもの自然な発達を損うことから、自然の発達に従って子ども自身に学ばせることを原則としたのは、将来成人に達して結婚した時、男女ともにその性の一致点と相違点が人の手になるものか、それとも自然のものであるかは大きな問題となることを予想していることである。したがって彼はソフィーとエミールの結婚にあたって、男女の性の一致点と相違点こそが、その教育思想の基礎的理論をなすものとして、彼特有の男女観を樹立していたのである。そこで、ルソーは、男女の一致点と相違点を性に関係のないものと性に関係するものとを分けて考察している。つまり男女が共に人間であることの認識の確立のためにである。そして性に関係のない男女について次のように述べている。

「性に関係しないいっさいのものにおいては、女性はすなわち男性である。女性も同じ諸器官と同じ欲求と、同じ能力を持っている。諸器官の構成も同じ仕組みであり、その各部も同じ、身体の動きもお互いに同じ、外形も相似ている。そして、ある点から両者を考察すれば、両者のあいだのちがいは多少の程度の差にすぎない。」391 ページ

ルソーは男女について性に関係のないいっさいのものについて、差異のないことを、女性はすなわち男性であると明言し、両者のあいだのちがいは多少の程度の差と認識している。そして、性に関係する男女の類似点と相違点について次のように述べている。

「性に関係するいっさいにおいては、女性と男性はいたるところに類似点を有し、またいたるところに相違点を有している。すなわち、両者を比較するむずかしさは、両者の器官構成において何が性に属するものであり何が性に属さないかを決定するむずかしさに由来しているのである。比較解剖学によれば、また、単に観察するだけでも、両者のあいだには、一般的な相違点のあるのがわかり、一見、性に全然関係ないように思われる。ところが、それらの相違点はやはり性に関係しており、ただその関連のしかたがわたしたちにうかがい知れないのである。すなわち、わたしたちには、それらの関連がどこまで伸び広がるものかわからないのである。わたしたちに確実にわかっていることは、両者が共通に有して

いるものはすべて人間という種に属するものであり、両者が相異なって有しているものはすべて性に属しているということである。この二重の観点のもとに、わたしたちは両者のあいだに実に多くの類似点と実に多くの相違点を見出すので、かくも相違した器官構成を備えさせながらかくも相似た二個の存在を創り出したことは、おそらく、自然の驚異の一つであろう。

こうした類似と相違とは、精神に影響を与えずにはおかない。その帰結はおのずから眼に見えたもので、経験的にも確認され、両性の優劣と平等について論議をたたかわすことのむなしさを示すものである。(中略)両者の共通点においては、両者は平等である。両者の相違点においては、両者は比較し得ないものである。完全な女性と完全な男性とは、顔よりも精神においていっそう似るはずのないものである。」392 ページ

ルソーは性に関係するすべてにわたって考察を試み、確実にわかっていることは両者がすべて人間という種に属するものであり、両者が相異なっているものはすべて性に属していることを観察と科学的考察に基づいて結論づけ、彼自身の男女についての認識としている。そして、彼は種と性の観点から男女を考察して、両者のあいだに多くの類似点と相違点を見出し、かくも相違した器官構成でありながら、かくも相似た二個の存在を創り出したことは自然の驚異であり、自然の神秘性はすなわち男女の存在の神秘性であると、彼自らの自然崇拜の思想が男女の自然性とその人間形成作用に対する畏敬ともなっている。このルソーの男女観は男女両性の間で独自の個性と人生が創造されるものであることの洞察であり、彼の教育観の基盤を成すものである。

したがって、このような両性の類似と相違とは種と性、形態(機能)と内面(精神)の問題であるから、両性は生活の過程で影響し合って、男女それぞれの独自の人間性を育てながら、影響を密にして両性の類似と相違の本質を一そう育て合わねば男女の人格の完成は望めないのである。

両性の優劣と平等について、彼は議論の余地がないと全面的に平等であるとの立場を堅持している。そして、両者の共通点においては両者は平等であり、両者の相違点においては、両者は比較し得ないものであると述べ、

両者の自然性と独自性こそが男女の人間としての存在価値であり精神であるとしている。だからこそ、男女の精神は絶対に似るはずはないと、男女の精神の独立と平等は自然の摂理であるとして、人為の関与を許さないとしている。そしてルソーは両者の結合において、男女の本質的な相違について次のように述べている。

「両性の結合においては、両性はそれぞれが共通の目的に対し、平等に力をあわせるが、しかし、その協力の仕方はちがう。この相違から互いの精神的関係のあいだに指摘し得る根本的な相違が生まれる。一方は能動的で強く、他方は受動的で弱くなければならない。一方は、必ずみずから欲し、欲するところをおこない得なければならない、他方は抵抗力がほとんどなくてよいのである。」392 ページ

男女の共通の目的に対しての男女の協力と活動は平等である。しかし、その方法は別である。男女の精神の相違を、男は能動的で強く、欲するところをおこない得なければならないと述べ、女は受動的で弱く、抵抗力がほとんどなくてよいと述べている。この対称的な男女の相違は身体的、精神的な面に及ぶ彼の両性の類似と相違に対する認識である。この男女についての彼の認識は男女の関係がどのようなものであるかについての原理を次のように述べている。

「この原理が認められたとすると、おのずから、女性は、特に男性の気に入るように作られているということになる。もし、男性のほうが女性の意を迎えねばならぬ場合があるにしても、それは、さほど直接的に必要なものではない。男性の価値はその力にある、男性は強いというこの一事によって好まれる。この場合、これは愛の法則ではなくて、愛そのものより以前の、自然の法則である。とわたしは思っている。」 392 ページ

女性は、特に男性の気に入るように作られている。この文章には誰れもが驚ろき意表をつかれる。ルソーは人の自然性を尊重する。このことは女性の自然性をも尊重することであるのに、この文章は女性を独自の人格者として見ていない。それのみか女性を男性の従属物として見ている。そし

て男性の価値はその力にある、男性はこの一事によって好まれる。と男性の存在を強調している。しかし「この場合、これは愛の法則ではなくて、愛そのものより以前の自然の法則である。」と女性と男性の存在とそのあり方について、彼は自らの見解を述べている。「愛の法則ではなくて、愛そのものより以前の自然の法則である。」と彼が言っていることは、人格としての女性と男性でなく、生物として、自然物としての男女の存在について言っていると私には理解される。そうであるならば、女性を独自の人格者として見ていない。また女性を男性の従属物として見ているなどの見解はあやまりであり、全く次元を異にするものである。ルソーの男女観は自然の法則に立つものである。そしてその論旨は男女の内面へと発展していく。

「もし、女性が好かれ、征服されるものとして作られているにしても、女性は男性を挑発するものではなくて、男性の意を迎えるものでなくてはならない。女性における力は、そのさまざまな魅力にある。その魅力によってこそ、女性は男性にその力を発見させ、それを発揮するようにしむけるべきものである。この力をふるい起こさせるいちばん確実な術は、抵抗を試みて力の必要をうながすことである。そこで、利己愛が欲望に結びつくことになり、そして、男性は女性が獲得させてくれた勝利をよろこぶのである。ここから、攻撃と防御が生まれ、男性の大胆と女性の小心が生まれ、さらに、自然が弱者に強者を屈従させるための武器として与える淑やかさと羞恥心が生まれる。」 392 ページ

男女の類似と相違は精神に影響を与えずにはおかないとの考えは、ルソーの重要な思想である。男女の人間関係は男女独自の精神を育てる。彼は男女の生活が培い育てた独自の精神を、「もし、女性が好かれ、征服されるものとして作られているにしても、女性は男性を挑発するものではなくて、男性の意を迎えるものでなくてはならない。」とあたかも女性は男性の従属物であるかのごとく述べているが、その意味内容は深く逆説的である。女性ならではのすぐれた特性を強調するための逆説であることが次に述べられている。

それは、「女性における力は、そのさまざまな魅力にある。その魅力に



よってこそ、女性は男性にその力を発見させ、それを発揮するようにしむけるべきものである。」などはまさに男性は女性の従属物である。事実、このようなことは生活のなかでよく見聞するところである。「男性の価値は力にある。男性は強いということの一事によって好まれる。」というこの男性の力も所詮、この力をふるい起こさせるのは女性である。その確実な方法は抵抗を試みて力の必要をうながすこと、すなわち、男性の知性と感性を刺戟して、当面の状況を適確に把握させ判断させて、女性のために行動をおこさせることである。男性の価値が力であるならば、男性は自尊心を満足させたい欲望にかられて弱い女性とともに共通の目的達成に全力を挙げて取り組むのである。そして、男性は女性の協力とたえず勇気づけてくれたことによって得た勝利をよろこぶのである。つまり、男性の女性の価値の認識であると共に男性の自己認識であり自覚の確立である。このような男女の生活から、攻撃と防御が生まれ、攻撃は防御を必要とし、防御もまた攻撃を必要とする。攻撃と防御の一体化は男女の一体化であり、男女の生存の確保にとって必要欠くべからざる宿命的営みである。男性の大胆と女性の小心はそれのみでは生存し得ないものであって、男女の肉体的相違と類似とが精神に影響を与えあって、男女の独自の性格を形成し、補完しあって、生存をより確実なものとしていく。さらに自然が弱者（女性）に強者（男性）を屈従させるための武器として与えた淑やかさと羞恥心は、女性のみのものではない。それは両性それぞれが共通の目的に対して平等に力をあわせるためのものである。

ルソーは苛酷な自然と社会のなかで人類保存がいかに困難であるかを、男女の生き方の歴史的編歴を通して物語っている。両性の類似と相違は人類保存にかかわる根本的意義を有する。また、男女の人間的葛藤は人類保存の力を両性に与えるためのものである。つまり、人間は男女の類似と相違によって人類保存を確保し、同時に両性の人間性を育て、その人間関係の望ましい確立をはかろうとしている。この人類保存のための男女の特性

は両性の葛藤によって、その特性を内外共に確立し人類保存に資するのである。

「もし、自然が女性に課しているような慎しみ深さを男性にも差別なく課するものとすれば、その結果は、間もなく両性ともに破滅となるであろうし、そして人類は、人類保存のために設けられた手段そのものによって滅亡することであろうことは、火を見るより明らかではなからうか？女性も男性の官能を動かし、しかもほとんど消えようとする情感の名残りさえかれらの心の奥底からかき立てることが容易なのに、」392 ページ

女性と男性は葛藤を深めながら、共存するための女性となり男性となる。このことを彼は逆説的に、「人間の女性の場合は本能の働きが消極的だから、あなた方が彼女たちから羞恥心を奪ってしまうようなことをしたら、その補いはいったいどこにあることにならうか？女性が男性をもはや気にしないようになることを期待するのは、男性がもはやなんの役にも立たなくなるのを期待することである。」と述べている。このことは、女性と男性がそれぞれの特性を理解し、認め合っこそ両性の特性が活かされるということである。女性の媚態的な拒絶はほとんどすべての女性、動物の女性においてさえも、共通のものであり、彼女たちがもはや応ずる気になっているときでさえ、媚態的な拒絶を示すのは、男性に対する期待であり受容であることを、男性が否定と感ずるのは女性理解の欠如であり感性の鈍麻である。男女の機微は男女の直観によって理解されるものであるから、男女の異性に対する関心と理解がより人間的になされなければ内面の理解には至らない。特に男性においてはなおさらである。

ルソーの男女論は両性の内面を深く究明している。彼ならではの独自の男女観を次のように述べている。

「至高の存在は人類に全幅的な名誉を与えようとしたのである。人間には限りなき愛情を賦与するとともに、同時に、それを規制する掟をも与え、人間が自由であり、かつ、自己支配するようとしたのである。ために、男性には、飽くな

き熱情を許すとともに、その熱情にそれを統御すべき理性を加えている。女性には、無限の欲望を許すととも、その欲望に、それを抑制すべき恥じらいを加えている。なおその上、人間のその能力を正しく行使した場合には現実的な褒賞をも与えてくれているのである。すなわち、人が正しいことによっておのれの行為の規制をなすとき、その正しいことに感ずる好みである。これらはすべて、動物の本能にかわるものと、わたしには思われる。」393 ページ

彼の男女論は人間崇拜の人間観に立脚している。この思想は彼の自然崇拜に根ざす人間観である。神は人類に全幅な名誉を与えようとしたのであると、彼は人間は神の創造物であり、神と人間は一体であると考えている。また、彼は人間は限りなき愛情を持ち、自律的で自己を支配し、自他の人格を尊重し自他の間で、よりよき人格を創造するなどの自由な精神的活動で、最高の生活を目指し、その人間性は自然の摂理と一体であるとの認識に立っている。したがって、男女両性の人間性の本質は神の創造物であり、自然物であるという観点で平等であると断定している。

それでは、男女それぞれの特質と相違についてはどうであろうか。彼の男女観はその特質及びその相違のすべてをふくめて、人間であるということである。神は人類に全幅的な名誉を与えようとしている。その名誉とは限りなき愛情を人間に与えることである。人間の名誉とは愛に生きることであり、愛情を生命とすることである。愛情はいついかなる時においても崇高で気高く美しくなければならない。そして自己を愛する以上に他を愛さなければ愛情ではない。そして愛情は汚されてはならないものである。そのために、人間は自由な精神的世界に生きることによって、愛情を限りなく育てる使命に生きなければならない。それにはきびしく自己に対峙して自らを支配し、利害にとらわれず真実の愛情を求めて精進をかさね、真の愛情に根ざす人生を創造することである。

真実の愛情を求めて、真実の愛情を自らの内にはぐくみ育てる営みは男女本来の姿である。神が人間の男女に愛情を与えた所以も男女の平等が生命の永遠と豊かな生活の創造を願ってのことである。しかし、神は愛情の

質とその表現については相異なったものを男性と女性に与えた。男性には飽くなき熱情を許すとともに、その熱情にそれを統御すべき理性を加えている。この熱情と理性は男性の自己支配である。そして女性には、無限の欲望を許すとともに、その欲望を抑制すべき恥じらいを加えている。この欲望と恥じらいは女性の自己支配である。なおそのうえに神は、人間がその能力を正しく行使した場合には現実的な褒賞をも与えているのである。すなわち、人が正しいことによっておのれの行為の規制をなすとき、その正しいことに感ずる好みである。この好みは利害をこえた男女の理解と協力によって味え得る快よさでありよろこびである。すなわち、最高の生活を目指す社会性であり人間性である。これらはすべて動物の本能をより昇華した人間の生き方であるがゆえに動物の本能よりもはるかに価値のあるものである。彼は男女の自己支配と正しいことに感ずる人間性のこの二つは人間必須の価値であると考えている。そこで、彼の人間観とその価値観が女性と男性の欲望について、どのような見解を持っているのかを考察してみることにする。

「そこで、人間の女性が欲望を分け持っていようがいが、またその欲望を満足させたいと思っていようがいが、彼女は男性を押しつけ、つねに身を守ろうとするのは事実である。が、つねに同じ力をもってするのではなく、したがって、つねに同じように成功するわけでもない。攻撃するものが勝利を収めるためには、攻撃される者が攻撃する者を許すかもしくは、命じなければならない。攻撃者にその力を振わせるようになんと巧みな手段を持っていることであろう！あらゆる行為のうちで最も自由で、最も甘美な行為は、実際の暴力ならけっして認容しないものである。自然と理性がこれに対抗する。すなわち、自然は、弱いほうの者にも必要とあらばいつでも抵抗するにただけの力を与えていることによって対抗し、理性は、実際の暴力はこの場合あらゆる行為のうちで最も野蛮なものであるばかりでなく、その目的とするところに最も反する行為であるとする。つまり、男性はこんなふうに女性に対して戦いを宣するものであり、攻撃者の命を犠牲にしてまでも彼女のからだを自由を守るべき権威を女性に認めているからであり、また、女性のみが彼女のおかれている状態の審判者であり、もしすべての男性がこれらの権利を侵害し得たとすれば、一人の子どもといえどもけっして

父というものを持つことがなからうからである。」394 ページ

そこで、女性が男性と共に欲望を分担していようが、いなからうが、またそれを男性と共に満たそうと思っていようがいまいが、女性は男性を押しつけ、つねに身を守ろうとするのは事実である。攻撃する者（男性）が女性に対して勝利を取めるためには、攻撃される者（女性）が攻撃する男性を許し認めるか、もしくは欲するか命じるかでなければならない。男性の女性に対する攻撃は、女性が男性を鼓舞することによってその力を振わせるのである。つまり、女性は巧妙な手段を操作して、真の愛を求め自らの欲望と男性の熱情を高揚して愛の一体化をはかろうと努めるのである。

あらゆる行為のうちで最も自由で、最も柔和で甘美な行為は、実際上の暴力をけっして認容しないものである。自然と理性がこれを認めないのである。すなわち、自然は弱いほうの者(女性)にも必要とあらばいつでも抵抗するにたるだけの力を与えている。この力とは女性が男性の理性を最高に生かすことである。それだけでなく男性の理性は男女間の歴史的あり方から女性に対して暴力はあらゆる行為のうちで最も野蛮な行為であると、いかなる目的に対してもそれを用いてはならないと、厳しく戒めている。まして女性に対しては用いるべきでないとして自重を促し禁じているのである。

つまり、男性は女性に対して暴力という野蛮な行為がいかに女性の心情を傷つけるか、また、女性の心を閉じさせてしまうかを知っているのである。男性の価値はその力にある。だからこそ、両性の結合においては、両性それぞれが共通の目的に対して平等に力を合わせ、男性は自らの力を充分に発揮すべく、女性との協力を願望するが故に、自らの力を暴力という野蛮なものに変えてまで、女性に迫るようなおろかなことは、慎しむのである。したがって、男性は女性を尊重し愛情をもって女性に働きかけるのである。しかし、これとは全く逆な暴力的攻撃者がいる場合には、この攻撃者の生命を犠牲にしてまでも、女性のからだを自由を守るべき権威を男性

は女性に認めているのである。女性は男性にとって愛情の対象であり、権威なのである。だが、女性は身体的力では、男性に劣ることから、無分別な男性の侵害にたえずさらされ、身の危険を切実に感じているのである。この女性の切実な危機感とは女性が男女の結合は男女の愛情の発露であり、愛の行為であることをアプリアリに知っているからこそ、そうでないものに切実な危機感を感じ、全身をあげて抵抗するのである。このことについてルソーはその愛情がいかに大切なものかを、センセーショナルに「もしすべての男性がこれらの権利を侵害し得たとすれば、一人の子どもといえどもけっして父というものを持つことがなかりうからである。」と述べている。ルソーは以上のように男女の欲望のあり方について、女性のおかれた立場や状態の微妙さは女性でなければわからないと、女性の心情で男性の女性に対する人間的な理解を求めている。そして男女の性の構成の内面を鋭く考察している。

「ゆえに、両性の構成についての第三の帰結はこうなる。すなわち、強いほうの者は一見主人と見えるが、実際には弱いほうの者に依存しているということだ。そして、それは女性に対する優雅な振舞といった軽薄な慣習によるのでもなければ、思い上がった保護者の寛容といったものによるのでもなく、実は自然の不変の法則によるのであり、自然は、男性に欲望充足の方法を与えるよりも、さらにそれ以上に容易に欲望をかき立てる能力を女性に与え、男性はたとえ欲望を持っていても、女性の意のままに従い、女性に依然として男性の強者としての立場を認めてもらうためにはかれの方から女性の気に入るように努めねばならないようにしむけているのである。そこで、男性が勝利を得た場合に、その勝利にいつその甘美さを加えるものは、はたしてそれは、力に屈した弱さなのであろうか、それとも、すすんで身をまかせようとする意のあったせいと、と疑うことである。そして、女性に普通みられるずるさは、彼女と彼のあいだのこの疑問をいつまでも解いてやらないことである。女性の心は、この点では、彼女たちの肉体に完全に似かよっている。すなわち、彼女たちは自分の弱さを恥じるどころか、それを名誉としている。彼女たちの柔らかな筋肉には抵抗力がない。彼女たちはごく軽い荷物でも持ち上げられないようなふうをしている。もし強ければむしろ恥じるであろう。これはなぜだろう？ それは単に華奢さやしやに見せようというためばかりでなく、もっと巧妙な用心からなのだ。彼女たちは、必要があればいつでも弱者で

あるという言いわけや権利を使えるように前から用意しているのである。」394 ページ

両性は人間としての精神と肉体の特性とによって、社会的役割を担い、社会を構成している。この男女の構成において強い男性は女性に対して一見主人と見えるが、実際には弱い女性に依存している。そして、これは男性の女性に対する優雅な振舞いといった軽薄な慣習によるものでもなければ、思いあがった保護者の寛容といったものでもなく、自然の不変の法則によるものであり、男女の本質的あり方である。

自然は、男性に欲望充足の方法を与えるよりも、それ以上に容易に男性の欲望をかき立てる能力を女性に与えている。男性は女性によって自らの欲望の充足がよりよく達成されるのである。だから、男性はその欲望達成のためには、女性の心情や意向を尊重して女性との欲望を燃焼させるのである。このことが、同時に女性が男性の強者であることを認め、男性は強者の地位を保つことになるのである。そのためには、男性は女性の心情を思いやり気に入るように努めなければならない。そして、女性は繊細な心くばりで男性を女性の気に入るようにしむけて男女の一体化をはかるのである。つまり、男女は多くの異性の中からかけがいのない特定のただ一人の異性を人格としてえらぶために両性それぞれがその特性を最高に生かし合っているのである。

このことは男性の欲望の充足は、女性の体質、性格、特性のすべて、すなわち女性的人格と共感的世界を伴にすることである。そこで男性は女性との欲望の充足の甘美さについて、あらためて自らのあり方について反省するのである。この甘美さは女性が男性の強者としての力を認めて愛情をもって男性を受け容れてくれたのか、それとも男性の力に屈従したにしかすぎないのか、これは、男性にとって最高の関心事である。しかし、女性のずるさすなわち知恵は両性の間のこの疑問に解答を与えないのである。なぜなら、この疑問は男性が、男女の望ましいあり方を求めての疑問であ

るがゆえに、永遠に男性に考えさせ深めさせるためのものであるからである。そして、このことが男性の女性に対するあこがれとも魅力ともなっている。また、女性はその人生において男性によって自らの魅力を創造し持続するのである。

男女の相違についてルソーは、なおも論理を発展させ、女性の弱さとその心について次のように論及している。「女性の心はその肉体に完全に似かよっている。女性は自分の弱さを男性に対して恥じるどころか、それを名誉としている。」「もし強ければむしろ恥じるであろう。」「もっと巧妙な用心からなのだ。」「彼女たちは必要があれば、いつでも弱者であるという言いわけや権利を使えるように前まえから用意しているのである。」と。

この女性の心と肉体の類似、そして自分の弱さを名誉としていることなどには、深い意味がある。これはルソーの女性理解への重要な問題提起である。そこで、これらの女性の弱さが男性に対してどのような意味を持つものかを相対的に考えると、女性のすべての仕種さは男性にとって、なまめかしく魅力的な恥らいとして映ずる。それは感觸の快よさといいたしさを感じさせ、何かしてやらねば、助けなければといった、労わりの気持ちを起こさせる。そして、女性の動きのすべてに美を感じ関心を深める。これらの諸々の日常的仕種の総合的結果は男性に自らが強くなければならないと意識させる。女性が何一つ要求したわけでも命じたわけでもないのにである。女性の弱さはこのように男性に男性であることを意識させ、女性を守り助けなければならないという自覚と使命感を持たせる。ルソーはこのことについて、「彼女たちは、ごく軽い荷物でも持ち上げられないようなふりをしている。もし強ければむしろ恥じるであろう。」と皮肉をこめて男女のぬきさしならない宿命的なしがらみについて述べている。

そこで女性の意識の深層を探ぐってみよう。「彼女たちは自分の弱さを恥じるどころか、それを名誉としている。」この意味は深遠である。女性は自分自身をアプリオリに愛している。女性に生れたことを自然の恩恵と



して神に感謝し、自らの肉体の弱さを誇りとも名誉ともしている。つまり、女性は男性を愛する以上に自分自身のすべてを愛しているのである。このことは男性がどうしても理解できない女性独自の世界である。ルソーの女性の深層心理の理解は鋭い。再度引用して考察することにする。「もし強ければむしろ恥じるであろう。これはなぜだろう。それは単に華奢キヤシヤに見せようというためばかりでなく、もっと巧妙な用心からなのだ。彼女たちは、必要があればいつでも弱者であるという言いわけや権利を使えるように前から用意しているのである。」女性の巧妙な用心とは、女性の自尊心である。女性は女性自身である自分を愛し誇りとしている。だから、いかなる場合でも、どのような理由があろうとも崇高な存在である自分自身を傷つけたり傷つけられたりしてはならないのである。女性がみだりに行動を起さない慎重な態度と用心深さは、すべて女性の自尊心と自愛によるものである。

したがって、なんらかの理由で男性との間で傷を負わされた場合、心と肉体の傷は癒えることはなく深い傷となって残る。嘆きは深くその苦悩は深刻である。そして、どうにも解決のつかない嘆きと苦悩にさいなまれ、自らを慰ぐさめる最後の手だてとして、弱者であるという言いわけや権利を使うのである。癒えることのない絶望的な自分の再生と未来の人生の創造のためにである。それほど、女性は自らを愛し自らの崇高な純粋性を誇り高く自らの手によって守ろうとしているのである。この自尊心と自愛が男性を支配する力となり、それが天寿を全うする生き方となり、人類保存ともなっている。

以上のことから、ルソーの男女論は男女のおかれた宿命を多面的、相対的に採りあげ、両性の社会的関係を総合的に考察しているのである。この考察は男女いずれもがその人生を生きぬくために、多くの課題をかかえ、そして解決しながら、両性ともに自然の創造物として、人間の種と性を最高に生かして生きぬいているという現実的事実から、女性、男性共にいず

れが優位であるとも、ただたんに平等であるとも単純にはいえないということになる。女性と男性が存在することがすべての根源なのである。

ルソーの男女論は、女性と男性とは肉体的にも精神的にも不平等であるとの見解に立っている。この不平等は自然そのものであって人為的なものではないということである。それどころか両性の協力協同の生活は、この自然的不平等がその原点であって、両性が自然の原理に従って生活することの重要性を示しているのである。彼の男女論はこの意味で自然崇拜の思想のうえに形成されているというべきである。このことが多くの人々の誤解をまねき、彼は女性を独自の人格と見ていないなどの酷評にさらされているのである。特に「教育史」の著者グレーヴス (Graves; History of Education, Vol. III, In Modern times, 1913 p.16) は、「ルソーの著作における最も弱みのある部分である。」と、『エミール』のこの第五篇を評している。そしてルソー批判の定説ともなっている。私は素直に丹念に『エミール』を精読して、自らの主体性で彼の真意に触れたいのである。

### 3. 『エミール』における結婚論

ルソーの男女論は結婚論へと展開して、その内容を拡大し深化していくのである。この男女の関係は肉体的なものと精神的なものとの一体化である。彼は肉体的なものが精神的なものへと変容することについては次のように述べている。

「どんなふうに、肉体的なものがわたしたちを知らず知らずのうちに精神的なものへと導くかをごらんください。そして、どんなふうにして、両性の粗野な結合からしだいに最も甘美な愛の法則が生れてくるかを、女性に支配権があるのは、男性がそれを欲したから女性にあるのではなくて、自然がかくあるべきものと欲したゆえなのである。支配権は、女性がそれを持っていることをあらわに示さないうちから彼女たちのものである (中略) この支配権は女性のものであって、彼女たちがこれを乱用する場合といえども、これを剝奪することはできない。もし

万一にも彼女たちがこれを失うことがあり得るとすれば、とっくの昔に失ってしまっていたはずである。」 395 ページ

肉体的なものが精神的なものを導き出し、両性の粗野な結合から次第に潤いのある甘美な愛の法則が生まれる。どのような理由でこうなるのかをルソーは女性に支配権があるからであると述べている。女性の支配権は女性にあることが好ましいとして男性が付与したものではない。自然は肉体的なものが精神的なものを導き出す働きは女性の働きであるとしている。

その支配権は女性の意識するまえから彼女たちのもので天賦の資質である。したがって、彼女たちがこれを乱用する場合といえどもこれを剥奪することはできない。しかしこのことは、男女の間で女性がいかに大きな責任と役割を担っているかでもある。男性は女性の支配に従ったり反抗したりすることで、女性との葛藤を多発させ男女関係が複雑にからみ合うことから精神の芽ばえとも発達ともなっている。そして、肉体的なものが、精神的なものを導き出す根源が、男女の性の相違にあることから、男女の性の相違とその生活の考察を通して男女の特徴を一層明らかにしている。

「性の一貫性については、両性の間の程度はまったくちがっている。男性はある刹那においてのみ男性であるが、女性は全生涯を通じて、あるいは少なくとも全青春時代を通じて、女性なのである。女性は何にかにつけて絶えず自分が女であることを思い出す。そして、彼女たちの機能をりっぱに果たすために、女性はそれに適した体質が必要なのである。妊娠中は慎重さが必要である。産褥につけば休息が必要だ。子どもに乳を与えるために、静かで引きこもりがちな生活が必要である。子どもを育てるには、忍耐と優しさと、何事にも失望することのない一種の熱情と愛情が必要である。彼女は子どもたちと父親を結びつける役目をする。彼女のみが、父親に、子どもたちを愛し、子どもたちをわが子と呼び得る自信を与えてやるのである。一家の和合を維持するために、彼女には、どんなに多くの優しい愛と心づかいが必要なことであろうか！ そしてさらに、こういわずべてが、美德としておこなわれるのではなくて、心から好んでおこなわれなくてはならないのである。さもなければ、人類はたちまちにして滅亡するであろう。」 395 ページ

ルソーは男女の性の相違を、男性は刹那、刹那においてのみ男性であるが、女性は全生涯を通じて、あるいは少なくとも全青春時代を通じて女性である。と両性の間には何等の類似もないことが男女の特徴であると明快に述べている。しかし、女性については期待をこめて、その機能とその働きであり精神的作用である高次な感情、情緒、知性などとその活動のなかでも最も大切な生命保全と人間性の育成についての保健、育児、教育、家庭経営、道徳などに言及し全生涯女性であることを強調している。

特に出産、育児、教育については、細部にわたって、最も大切な事柄が細心の配慮のもとに考察されている。そして、家庭生活において、現代の家庭生活の崩壊を予見しているのではないかと思われる重要な事項が述べられている。いつの時代にも家庭における女性の支配力は偉大である。女性の家族に対する支配力と家庭経営についてルソーは母親のみが、父親に、その子どもたちを愛し、子どもたちを真にわが子と呼び得る確信を与えるのであると述べている。一家の和合をはかり維持するために、彼女にはどんなに多くの優しい愛と心づかいが必要であろうか。と母親の家庭経営の権限の絶対と家庭をより豊かに創造する独自の裁量権がいかに偉大であるかを、父と子の精神的関係及び一家の和合などを中心とする母親の役割と、いかなる侵害をも許さない家族の愛の世界とを毅然たる態度で守るべきであるという使命感を示している。

しかし、母親のわが子への愛情は、子どもを独占して子どもと、排他的な世界を創り夫といえども排除するような傾向がある。このような母親の愛が陥る危険性を防ぐための夫の妻に対する敬愛と協力の必要をルソーはよく承知している。女性の愛の特徴は母親になって一層鮮明になる。母親の優しい愛と心づかいは夫婦の敬愛を中心とする精神性に支えられてこそ、父と子、一家の和合に献身的に作用するが、夫婦間の裏切りと不信は逆に父と子の関係を最悪と化し、家庭の崩壊と家族離散に作用する。母親は妻でも女でもあることから、その優しい愛と心づかいは夫のあり方次第で敬愛

とも憎悪ともなることをルソーは父親（男性）に警告しているのである。

だからこそ、妻の一家和合を維持するための優しい愛と心づかいは、美德として他から与えられたものとしておこなわれるのではなくて、日々夫婦の敬愛を深め合う生活によって心から納得しておこなわれなければならない理由もここにある。ところがルソーは、たとえ夫婦の間が裏切りと不信で冷えきっていようとも、女性の、たしなみとしてがまんし自重して、父と子の愛の保持や一家和合を維持するのではなく、妻であり母親であることは、すべて自然の創造物である女性であってはじめて為し得ることであるから、女性が自然の原理に従って生きてこそ、夫の裏切りや不誠実が、自滅の道をたどることは明白であっても、女性（妻）は男性（夫）の不道徳を超越して一家和合のために、優しい愛と心づかいを最高に生かさなければならない。と無謀ともいえる願いを女性に求めている。

したがって、美德などという虚なものでない自然を母とする女性が自然の摂理に生きてこそ女性であると、誇り高く女性らしく強く生きることをルソーが熱望した所以は彼が自然主義の思想に徹しているからである。彼はかくも美德などより自然の原理そのものである女性に期待しているからこそ、「こういうすべてが美德としておこなわれるのではなくて心から好んでおこなわれなくてはならないのである。さもなければ、人類はたちまちにして滅亡するであろう。」と述べているのである。夫婦生活は肉体的な融合が精神的愛を育て、肉体と精神の一致へと昇華しながら、肉体に精神を宿らせ、精神に肉体を与えて、再生に次ぐ再生で二人の愛をよりよく確立していくのである。しかし、肉体と精神の一体化も所詮男女両性の営みである。そこでその男女が、愛を形成するに当って、どのようにそれぞれが自らの義務を果すかが問題である。この夫婦の相対的義務についてルソーは、両性の相互的義務の程度は同じものでもないしまた、同じではありえないことを次のように考察している。

「両性の相対的義務の厳しさは同じではない。また同じであり得るものではない。それゆえ、女性が、男性のほうが不当不平等に優位にあると不満をいうならば、それは間違いである。この不平等は人間の作った制度ではない。あるいは少なくとも偏見の所産ではなく、理性の所産である。すなわち、自然は両性の一方の側、男性に子どもたちの養育の責任を負わせて、他方との釣合いをとったのである。だからもちろん、その信託を裏切ること何びとにも許されないことであり、自分の妻から女性のきびしい義務の唯一の報償を奪うような不実な夫はすべて不正で野蛮である。しかし、不貞の妻となるとそれ以上である。彼女は家庭を破壊し、自然のあらゆる絆を断ち切ってしまうのである。彼女は夫にかれの子でない子を与えることによって、夫をも子どもをも裏切るのである。彼女は不実に加えて裏切りをおこなうのである。こういう夫がどういう放蕩をし、どういう罪を犯してもやむを得まいと思う。世におそるべき境遇があるとすれば、不幸な父親のそれである。かれは自分の妻を信頼することができず、かれの心の最も甘美な感情に浸ることもならず、子どもを胸に抱きながらも、他人の子を抱いているのではなからうか、自分の不名誉の証拠ではなからうか、自分のほんとうの子どもたちの財産を横領する者ではなからうかと疑うのである。そうすると、この家族は、むりに互いに愛し合っているふうを装いながら、実は一人の罪ある女のために互いに武装しあっているひそかな仇敵同士の寄合いでなくて、なんであるう？」 395 ページ

両性の相対的義務は同じものではないし、同じではありえない。まさに名言である。特に夫婦生活において、いかに男女同権を主張しその実現をはかろうと努力しようと、夫婦の義務と役割は平等というわけにはいかない。男女の性の相違は女性に妊娠、出産と過重な負担を強いている。育児、家事をいかに分担しようとも平等にはならない。まして、母親は自らの理想や希望を社会で生かすことを多くの場合放棄せざるを得ないのである。それに、子どもを生き育てる母親としての苦労は並大抵ではない。これらを総合して家庭生活の現象面から考えると、女性が、男性のほうが不当不平等に優位にあると不満をいうならば、現代の男性の多くはそれを認め、夫婦の協力で何とか解決しようとしているのが現実的趨勢である。初めからそれは間違いで、それは自然の所産だとは言わないはずであるが、ルソーは、女性の不満について、それは間違いである。この不平等は人間の作っ

た制度ではない。あるいは少なくとも偏見の所産ではなく、理性の所産である。と述べているが、たしかに男女とも人間は自然の所産であることにまちがいないとしても、また、男女の自由意志に基づく合意の夫婦であれば、両性で家庭を創造したのであるから、妻の不平不満である不当不平等については、自然の所産であるではすまされない。だが、この女性の過重な立場とその不満について、ルソーはよく承知していて、その解決策と男性のあるべき立場を示している。それは夫の養育の義務と妻への敬愛である。夫婦生活において、男性に子どもの養育の責任を負わせることによって女性との釣合をとったのである。そして、子どもの養育は当然妻をはじめとする家族全員の養育の責任を意味する。まして、この義務は自然の法則であるから、その信託を裏切ること何びとにも許されない。と男性の家族の人間としての物心両面の生活に対する義務と責任を強調している。

養育の義務は夫の物的な生活面での義務であるとするならば、精神的な義務として夫は妻を誠実に愛し尊敬することである。夫が妻のみを誠実に愛することは、妻の女性としてのきびしい義務に対する夫の唯一の愛のあかしであり報償である。だから、夫が妻の信託を裏切るとは夫婦の愛の尊厳において許されない。もしも、妻を裏切るような不実な夫は、すべて不正で野蛮である。ルソーは厳しく夫が妻を敬愛するその名誉を汚すことのないよう戒めている。それでは彼は敬愛に対する不貞についてどのように考えているのであろうか、考察を深めることにする。

しかし、妻の夫に対する不当不平等の不満の根は深いのである。それは、社会的な不貞についての夫と妻のあつかいの違いである。夫の不実については、すべて不正で野蛮であるですますが、不貞の妻となると、その批判は実に厳しいのである。彼女は家庭を破壊し、家族・肉親の自然のあらゆる絆を断ち切ってしまうのである。彼女は夫にかれの子でない子を与えることによって、夫をも子どもをも裏切るのである。と妻の不貞を責めるかと思うと、この妻の夫はどのような放蕩をし、どのような罪を犯してもやむを

得まいと、その夫の境遇に同情するのである。それでは、不実な夫の妻は  
どうなるのであろうか、このことについては、なんらの配慮も同情も述べ  
られてはいないのである。そればかりではない、不貞をはたらいた妻の夫  
の境遇を女女しく、くどくどといつ果てるともなく述べている。それは、  
世におそるべき境遇があるとすれば、不幸な父親のそれである。かれは自  
分の妻を信頼することができず、かれの心の最も甘美な感情に浸ることも  
ならず、子どもを胸に抱きながらも、他人の子を抱いているのではなから  
うかと。そして自分の不名誉、財産の横領などにまで綿々と愚痴が続き、  
最後は家庭の崩壊について、こういう家族は、むりに互いに愛し合ってい  
るふうを装いながら、実は一人の罪ある女のために武装しあっているひそ  
かな仇敵同志の寄り合いでなくて、なんであらう。とうらみつらみを並べ  
たてているのである。

不貞の妻を責めるまえに、夫自身にも責任の一端はあるはずなのにと何  
とも割り切れないものを感じる。このような夫だからこそ妻に不貞をはた  
られるのであろうと思えば、納得もいくものの、このようなぐうたらな  
夫なら、不幸な父親にも、人の子を抱く羽目にもなるであらうし、家庭は  
仇敵同志の寄合にもなるであらう。そこで、望ましい夫とはいかなる夫で  
あるのかを知りたくなる。しかし、ルソーは女性の貞節については、具体  
的にくわしく述べているが夫のそれについては抽象的にごくわずかすべて  
不正で野蛮であると述べているにしかすぎない。

「ゆえに、妻はただ貞節であるばかりでなく、夫から、近親から、みんなの者  
から貞節であると判断されることがたいせつなのである。彼女は謙虚で、注意深  
く、慎しみ深いことがだいじである。また自分の良心とともに、美德のあかしを  
他人の眼にもしっかりとめておくことがたいせつなのだ。さらに、もし父がその  
子を愛することがたいせつだとすれば、彼女にとっては、子の母親として尊敬さ  
れることがたいせつである。以上のごときことが、女性の数多くの義務の上に、  
そのあらわれをも必要とし、名誉や評判を貞節そのものに劣らず欠くべからざる  
ものとする理由である。以上の原則から、両性の道徳的差異とともに、特に女性



に対しては自分の行為や態度や身持について細心の注意を命ずる新たな義務と行儀の動機が生ずる。漠然と、両性は平等であるとか、その義務は同一であるとか主張することは空論に墮するものであり、それに答えるものでないかぎり、なんの意味もないものである。」396 ページ

ルソーは、妻の貞節を厳しく求めている。妻の貞節は貞節であることに加えて、夫や近親者からも貞節であると認められることが大切で、認められない場合は不貞と見なされるのである。したがって、彼女は謙譲で注意深く慎しみ深くなければならない。そして、彼女の心が清浄であるとともに、美德のあかしを他人の眼にしっかりとめておくことが大切なのである。これでは息苦しくてならないであろう。まして、妻の家庭での仕事にはこれでよいという限界はなく無限である。それに妻は女性なのである。その繊細な心はどうなってしまうのか誠に心配である。さらに、子どもに対して、父親が子どもを愛することが大切だとすれば、母親はその子の母親として尊敬されることが大切である。と子どもの教育のすべてを母親にまかせ責任を負わせている。もしも母親が尊敬されることなく、子どもの教育がうまくいかない場合には、父親はわが子を愛さなくてもよいのだろうか。子どもの教育は夫婦の責任でなされることを、その思想とするルソーにおいて、何とも合点のいかないことである。それになぜ男性は子の父親として尊敬されなければならないことを強調しないのだろうか。

このように彼の家庭教育論は一見、矛盾しているように考えられるがそうではない。彼は子どもの教育は夫婦の理解と敬愛に基づく協力と責任においてなされなければならないことを十分承知したうえで、父親よりも母親のほうが教育について適性を有すると判断しているのである。それは、多くの父親が家庭生活のなかで生活的知恵として家庭教育の主体は母親のほうが適当であると考えていることを洞察してのことでもある。そして、母親が家庭教育の担い手であることは、子どもの成長をより正常化すると共に子どものバックボーンの形成に一貫性を持たせることになる。家庭教

育において子どもの望ましい成長は子どもに混乱を与えないことである。したがって、子どもの教育にとって母親は適任であり、家族全員が母親の家庭での権威とその指導性を高めるために協力しなければならない。ルソーはこのことを「もし父がその子を愛することがたいせつだとすれば、彼女にとっては、子の母親として尊敬されることがたいせつである。」と述べ父親としての子どもの教育は、母親(妻)を尊敬することであり、妻に全幅の信頼をよせることであり、家族全員にこのことを徹底させることであるとしている。

女性は何と多くの義務を課されていることか。それに加えて、この義務を完全に成し遂げなければならないばかりか、その義務遂行の証を残すために、たえず夫やまわりの者を意識して、自分の行為を世間に印象づけるよう努めなければならない。そして、自分が貞節について何を為したかよりも、世間に対してどうしたらよりよく認めてもらえるかの名誉や評判に気をつかわなければならないのである。これは一見、女性の内的精神性より、外的形式を重んずる形式重視の原則であり、女性差別とも考えられるが、実は内容形式の一体化こそが女性の尊厳を守り確立することであるとルソーの意味深い逆説であって女性差別ではないと考えられる。まして、女性が社会的に承認されることは女性の実力を社会的によりよく発揮することになるのである。彼の女性に対する期待は家庭内のただ単なる妻としての働きにとどまらず社会的な活躍にも期待しているのである。

このような女性に厳しい社会的原則と両性の道徳的差異は、男性が女性に対して自分の行為や態度や身持について細心の注意を払わなければならない義務を自分自身に課することであり、新たな義務と行儀のもとに身を処し、姿勢を正すことになる。女性に厳しい道徳的、社会的規範は同時に男性の規範ともなるのである。以上のように結婚における両性の義務について、ルソーはそのあり方とその実態とを述べてきたのであるが、その思想を次のように明確に結論づけている。漠然と両性は平等であるとか、

その義務は同一であるとか主張することは空論である。それを裏づける原理を示してこそ納得されるのであると、また男性の行為や態度や身持について、男性自らの義務の履行は女性特に妻に対する敬愛であるとしている。すなわち夫婦相互の敬愛による愛の家庭の創造である。このことが、女性の男性のほうが不当不平等に優位にある。との不満にこたえる解答にもなっている。すなわち男性が女性を人格として認め、そして女性の可能性を内外共に発揮させるよう内面から協力することである。このことは、夫婦の性的結合の持続性と安定性となる。それが同時に社会の安定ともなり社会秩序の保持ともなる。人間社会が男女両性の間のあらゆる社会関係において安定した秩序を保持すれば、家庭における子どもの人格形成はよりよくなされる。そして文化の創造ともなり人類の繁栄ともなる。したがって夫婦の敬愛は教育の必須の条件である。しかし、それにしてもルソーの結婚論は、なぜこのように女性に厳しいのであろうか、それが女性に対する期待であったとしても。

このことについて、押村襄は、その著『教育観の転換—ルソーの視点から—』206ページで次のように述べている。「女性の責務を家庭内に見出そうとしている点は、ルソーの目に映ったパリのサロンの貴婦人たちが家庭生活の美德をまったく省みなかったことに対する批判を含んでいる。ルソーが女性に対してつねに多かれ少なかれ『母性』を求めた。母を知らずに大人になったルソーの心情の中に、母性を理想化する傾向が強かったことは認めることができるであろう。」ルソーは、パリのサロンの貴婦人たちの家庭生活と男女の不倫を見ることによって、家庭の崩壊と子どもの不幸を救済したいと願っていたに違いない。それに母シュザンヌはルソーを生んで九日目にお産がもとで死んだ。「わたしの誕生は、わたしの不幸の第一であった。」と『告白』には書かれている。ルソーの波瀾に富んだ生涯は、どれほど彼の心を痛めてきたことであろうか。

その帰結は女性に期待することであった。彼はこのことを、家庭におけ

る妻の支配権とその働きの前には、いかなる夫といえどひれふさなければならぬのである。とも述べている。男性に期待できなかった彼は女性に期待し、女性に苛酷なまでの要求をしたのである。そして、このことは当時の社会の道徳の頹廃と女性の社会的立場を憂い、その復興を女性が創造する家庭と社会に期待し、その実現を願っていたにちがいない。